

## 第2分科会（島根県）

主題：自ら考え、工夫しながら生き生きと生活をする幼児の育成

- 3歳児、4歳児、5歳児の発達に着目して -

指導助言者：肥後 功一先生

司会者：種平 知美先生

発表者：小村 祐子

記録者：安田みなみ 森川奏子

### 1、 発表の概要

#### （1） 主題設定理由

子どもたち一人ひとりが自らの力で考え工夫し日々遊びを楽しむことこそ、生き生きと生活をしていくことにつながると受け止めたため。

#### （2） 取り組みについて

- ・ 子どもの心の動きを捉え、豊かな活動を引き出す教師の支援方法を探る。
- ・ 発達段階を踏まえた活動の工夫
- ・ 「おもしろそう」「やってみたい」と子どもの心を揺さぶる工夫

#### （3） 実践例

- ・ 3歳児「ごっこ遊びから」
- ・ 4歳児「乗り物遊びから」
- ・ 5歳児「砂鉄と磁石遊びから」

#### （4） 反省と考察

- ・ 3歳児・・・教師は継続する遊びこそ幼稚園の遊びであると勘違いをしてしまうと、3歳児の子どもたちの全力でぶつかる姿が失せてしまった。一人ひとりの遊びの様子を見ながら、一人ひとりと会話を楽しみ、子どもの考えを受け入れることが、より子どもたちの意欲ややる気につながっていくと感じた。
- ・ 4歳児・・・教師の願いを優先していて、子どもの遊びが見えなくなってしまうことに気づき子どもたち本来の遊びの意味を取り違えていたことを反省した。子どもの遊びのタイミングを見てどのように出会わせるか環境との出会わせ方が大切であると感じた。
- ・ 5歳児・・・教師は、子どもの動きを捉えるために、じっくりと話を聞いたり、どんなところに遊びの面白さを感じているのかを受け止め、子どもと共有感がもてるようになると、一人ひとりの子どもが行う行動の意味が理解できるようになった。

#### （5） 今後の課題

一人一人の遊びを支える指導計画と保育の構想の工夫。

## 2、 研究討議

(1) 発表後、グループ協議に移る。 5～6名グループができる。

- ・教材庫の広さ、どんな教材を置いているのか、どこから貰ってきているのか
- ・遊びの中から実際に電車に乗って体験させている教師の指導性に感心した。(4歳児)
- ・子どもの言葉で砂鉄遊びがどんどん広がっていることから、教師が子どものつづやきを大切にしていることが分かった。(5歳児)
- ・クラスみんなが砂鉄遊びに集中するように教師はどのように声かけをしていたのか。

指導助言 肥後 功一先生

3歳児

- ・子どもは思いついたことを次々に言葉にしているが、実際は花火のようにその言葉は消えてしまう。教師はすぐに子どもの発想に食いつき、遊びを広げようとするが、子どもは教師が思う程その言葉や発想を重要視しているわけではない。そのため、子どもが違う遊びをしていると教師は「遊んでいない」「遊びが続いていない」と思ってしまう。子どもは大人には見えない何か遊びの中で続いているため、教師はその何かを知ることが大切である。

4歳児

- ・4歳は自分の発想をみんなの前で発言する時期。～だよね?～でしょ?と投げかけることで、コミュニケーションが広がり、会話が盛り上がる。子どもは一つの遊びに対してたくさんイメージをするため、教師は遊びの中身を一つに絞らない。  
転がる 速く走りたい、友だちを乗せたい、お店に行きたい  
幼稚園は実際の空間とイメージの空間をもっているので、教師はその二つを上手く使い分けていくことが大切。

5歳児

- ・科学的思考が出てくる時期。砂鉄のように普通では見えないものが磁石を使うと見えてくることに興味を示す。5歳の教育でよくありがちなことは、みんなで一緒に考えて、みんなで一緒に行動する(遊ぶ)ことが良い集団行動であると勘違いしている。本来の集団行動は、一人ひとりがしっかりと自分の意見を持ち、その意見を共有し合えることができることである。

(2) 全体指導助言

- ・意見を言えない大人が増えてきている。その世の中で子どもが意見を積極的に言えるわけがない。大人自身が自由な気持ちになって意見が言い合えても大丈夫な関係を築くことが

大切である。教師が一人ひとり個性的だから子どもも個性的に育つ。その中で共通理解をしていくことが大切である。

幼児期は基礎力も大切だが思考力は後では身に付かないため思考力を深く考えてほしい。子どもの思考力を高めるためには、保育者自身も思考力を高めなければならない。

### (3) 反省と課題

- ・グループ協議の後、全体討議を行ったが、意見が出なかった。各園の研究体制や保育の内容がもっと知りたいため、意見を出し合い他園を知ることで学ぶことがたくさんあるように感じた。
- ・肥後先生の指導助言では、年齢に応じてそれぞれの発達の特徴を聞くことができ、子どもの表面だけでなく、内面をしっかりと知ることが必要だと改めて考えることができた。
- ・どの園も自分たちの保育を真剣に考え見つめ直すことで、もっと意見や質問が出て良い研究会になったのではないかと感じた。

